

彼女の《面影》草子から  
 たなかあきみつ

ある日半開きの店頭のガラス戸から  
 シューシューと風切羽Ⅱ金属的に  
 ソーリンゲンの刃物は  
 生ぬるい微風を裂いて行ったりきたり  
 金物屋の刃物さばきは  
 若くとも手なれたものだ――  
 一週間ほど前に研ぎを依頼したのは  
 ずっとさきだらう  
 さあこれでよく切れるようになったが  
 このソーリンゲンを試めしに  
 きみを使うことはあるまい――  
 きみはさほど花屋を訪れたことがないと  
 女友達は思っていたようだ  
 きみはもっぱらアネモネだつたと  
 あくまでも言い張る  
 アネモネは濃い《夕闇》として開花するや  
 あつてなくシャレードの脳片のように  
 《断崖を通過し》  
 おまけにほくには  
 アネモネは《得体の知れない花》だつた  
 いきなり路地裏の沼地で  
 人面化するような花だつたのに  
 いつも猪首のホルスト・ヤンセンにならつて  
 本物のアマリスを欲しがつて  
 きみになんだか季節はずれだよと  
 大笑いされたこともある  
 ――どんなお花をお探しでと  
 花屋の店員に声をかけられると  
 たちまちまぼくはだんまりのヒツポクラテスを決めこむ  
 きみは花の名前をすらすら挙げるのは  
 どうも虚仮おどしみたいと嫌がった、

夕暮れに  
 久野雅幸

鳥の影が壁を横ぎる夕暮れに  
 去つた鳥ではなく  
 壁をよぎつた鳥の影のがわに  
 わたしは立つ  
 かなしくはないよ  
 ここに立てば  
 ただ現象として立ちあらわれているしかない  
 わたしなのだから  
 否定の中で使われたときに限つて  
 永遠が実体をもつ  
 永遠に戻らない  
 永遠に届かない  
 永遠に手に入らない  
 「ない」という形でしか永遠を体験できない  
 わたしたちなのか  
 あるいは  
 「ない」という形で永遠を体験し続けるしかない  
 わたしたちなのか  
 河原で石をひろい上げている人がいて  
 ひろい上げられた石の中に  
 河原で石をひろい上げている人いる  
 夕暮れです  
 自分がいまだここにいるのか  
 どうして明確に言いきることのできる  
 わたしたちでしようか  
 いまごろの時間  
 きまつて父が台所のテーブルで日記をつけるようになったのは  
 アルツハイマー症を患つて母が六十六歳でじくなつた  
 あとのことではないだろうか  
 影も色もそうだよ  
 あるのかないのか  
 わからないね  
 目をつむる  
 横になつて眠るものは  
 倒れて眠るものだと思う



窓の外でいつしか降りだした雨に  
 とにかく《油断》しようものなら  
 黄色やサモシンクや藍染めまでも  
 花の首はガクンと折れるから――  
 花びんの水の腐り気がいや増すから――  
 あの夜の脳内出血の予兆は  
 あつい湯舟につかりたくなるほどの  
 ひどい寒がよきだつた  
 寒い寒いとつぶやいて  
 にわかにフロリリングの床上の敷布団から立ち上がり  
 新品のマスクをつけ直し  
 さっそく机上の加田裕太郎よろしく  
 すーつとそのま闇の中へ消えた、  
 レンズの外れかけた《今宵》も  
 アンゼラム・キリファアの  
 山間の強制収容所へむかう  
 石ころだらけの《鉄路の小径》や  
 レンガ工場のこなごなのレンガ屑のテリル  
 インスタレーションの変哲もない写真Ⅱ記録を  
 独相大辞典と首つびきで  
 ぼくは穴のあくほど見つめていた――  
 きみが亡くなつたのは  
 ちょうどその頃だつた。  
 ロシア軍によるウクライナ侵攻が  
 オリガルヒたちの不審死が  
 《見境もなく》はじまり、今も進行中で  
 自分たちの汚れた手を手くすね引いて  
 革手袋でさらに汚さないようにするためにだけ  
 ひたすらミサイルを発射するのだ  
 そして新旧武器の発情オンパレードよ  
 いかなる侵略戦争のグリフールも  
 殺意の乱反射をうながす、

ひかり座  
 池田 康

ひかり座は 夢幻の舞台  
 国なる劇場の夢幻を宣言する  
 ひかり座は 誰でも入れる  
 どの大陸のどこにも扉はないのだが  
 ひかり座は 自由にして高慢  
 台本に一切の検閲を許さない  
 ひかり座は 大見得切つて約束する  
 誰の許可もなしに芝居を打つと  
 ひかり座は 地球をテントで包む  
 盗みや喧嘩は蹴飛ばして追い出せ  
 ひかり座は あらゆるあなたを受け入れる  
 観客として 座員として 作家として  
 ひかり座は 秘密結社  
 国境を越えて蝶や蝗となつて広がる  
 ひかり座は 《未来》の隕石  
 愚鈍なメトロポリスの恐竜を過去に追いやる  
 ひかり座は 漆黒の交差点  
 うら道ぬけ道もくら道あらゆる場所がつながる  
 ひかり座は うかれキャラバン  
 気のむくままに此岸彼岸をさまよう  
 ひかり座は 天を憲法とする  
 読むに読めない呑気な悠遠さも含めて

瞬時にしか拡散出血しないはずの  
 サイバー戦もじつは気まぐれに眼底にまで  
 気ぜわしく残酷さを先導していく  
 ところで重い骨壺の中で  
 折り重なりつつきみは  
 隣家のシヤボン玉遊びの歓声を  
 ちゃんと自分の耳で聞きとれただろうか？  
 超低空で飛びまわるシヤボン玉の群れを  
 しかと見届けられたらどうか？  
 耳朶ロックダウンをスピントオフして《破断》  
 ぼくのほうはようやく食らいつく  
 ルービックスキューブ3×3を  
 ダミアの祖国で買求めたところだ。  
 そして屋根の上の最新アンテナに  
 朝から陣取る大鵬よ……  
 その声色はカアカア極彩色だ。



ひかり座は 太陽を神とする  
 あまり当てにならないパトロンというほどの意味の  
 カンパニーに乾杯！  
 ひかり座はうたう無産家味な幾億の生のために  
 歓声は土まみれの動物たち逸民たちの咆哮  
 カンパニーに乾杯！  
 ひかり座は 貧しい  
 算盤をはじくはずの指がギターを弾いている  
 ひかり座は 生きていく  
 呼吸 対話と独白 離合集散 開花と結実 睡眠  
 ひかり座は 映笑する  
 ちくちくうるさいモラルの麻縄に縛られるな  
 ひかり座は くつろぐ  
 お茶と冗談を喫らない一日は不毛だ  
 ひかり座は 悪趣味な食通  
 大好物は大統領の骨をダシにした團圓鍋  
 ひかり座は アナーキーにぎやか  
 役柄のあるなし入り乱れアイデンティティを交換する

ひかり座は 透明  
 時代の風景に融けて見えたり見えなかつたり  
 ひかり座は 行方知れず  
 探す者も知る者も営む者も微笑んでしらばくれる  
 ひかり座は 夜討ち朝駆け  
 ごみ山にうまれる思想を拾い夢の叢にすだく言葉を得る  
 ひかり座は コスモポリタン  
 どんな片言どんなスラングをつかってもいい  
 ひかり座は 座頭がない  
 シテの幽鬼は千年先に立つ  
 ひかり座は 神出鬼役のステージ  
 お涙頂戴の演説をしたがる輩を奈落へ落す

マリウポリ  
 生野 毅

まぶたが  
 いたるところに  
 たくさん  
 落ちている  
 まぶたを  
 拾つてはいけない  
 たくさんの  
 目が  
 ほんとうは  
 見たくないものを  
 見てしまうから  
 たくさんの  
 まぶたの  
 裏がわに  
 ほんとうの街並みが  
 どこまでも  
 どこまでも  
 逆さまに  
 連なっているから  
 もうすぐ  
 もうすぐ  
 たくさんの  
 まぶたで  
 覆われた  
 ほんとうの街並みを  
 大きな  
 大きな  
 まぶたが  
 やさしく  
 柔らかに  
 包んでくれるから  
 まぶたを  
 拾つてはいけない

マリウポリ市民の或る男性は、「すばらしい毎日  
 だった。……今はもう、何も無い。」と語つた。  
 マリウポリ市長は、「この世に地獄というところ  
 があるなら、まさにここがさうだ。」と語つた。  
 アンコールは無礼講  
 ひかり座は憤り理不尽に沈む幾億の生のための  
 沸騰する血は光に変電され《木》の文字となる  
 アンコールは無礼講  
 ひかり座は 永遠のヒッピー族  
 あらゆる旗の裏側で遊ぶ  
 ひかり座は 逃亡者集団  
 あらゆる善と悪の強権から一目散に逃さかる  
 ひかり座は 悲劇を上演する  
 この世は奇怪な喜劇であるという非情な悲劇を  
 ひかり座は 太古の序曲を発願する  
 次の次の次の時代を開く大音の鍵として  
 朝目覚めたらひかり座の主役だつた  
 これはよくあること  
 ひかり座は 今夜も舞台  
 荒野の闇のまんなかに灯がともる

